

音楽表現を思考するアンサンブル活動

－ 聴き合い、語り合い、学びを繋ぎ生み出す歌唱実践 －

低学年から音・音楽と言語によるコミュニケーションの場を積極的に取り入れてきた実践活動のおかげで、5年生ともなれば、見知らぬ音楽を聴いた際の第1印象を、自分なりの言葉で書き表したり、オラルで表現するようになる。また楽譜を読むことに苦手意識をもっている児童でも、音楽を聴こうとする姿勢と聴く力は歌の習得の支えになる。学習曲は『音楽のおくりもの5』に掲載されている《ハロー・シャイニングブルー》、前半は斉唱、後半から2部合唱に切り変わる。音符、休符、リズム、プレス記号、強弱標語(クレッシェンド)、音色、音の重なり、たてと横の関係、問いかけと答えなど、音楽を特徴付けている要素や仕組み等の理解を促してくれる作品である。

国語科から音楽科へ～音楽表現の思考を育む歌唱実践

歌唱実践に入る前に、歌詞の読み方を考えること、例えば歌詞が明確に聞き取れるような発音の仕方、言葉の強弱や抑揚(ニュアンス)、言葉のまとまり(フレーズ)や区切り(休符)等を考えながら声で歌詞を表現する実践活動は、音楽的な表現を考える第1歩となろう。実際に歌を習得していく場面で、歌詞に音とリズムが付き、それを繋ぎ、歌となって歌詞を運んでくれるまとまりが形成されていくと、音楽科の見方・考え方をもつことが、表現の工夫を実現していく上で不可欠になる。例えば「付点リズム」に注目すると、付点リズムがどの歌詞の部分に付けられているのか、歌詞の音節と付点リズムの関係はどうか、音の動きによって歌詞の中の強弱や抑揚がどう変化するかという問題意識が生まれ、また韻をふむ仕組みにも気付かされる。そして歌唱実践が、音楽の流れの中に登場するこのリズムを自分はどのように感じ、それを歌い方にどのように反映していくかという思考を育む機会を提供してくれる。

省察を重ね、歌声が証明する学びの成果

《ハロー・シャイニングブルー》の楽譜上に強弱記号が記されていない点に着目し、本授業のテーマは「強弱をつくりあげて歌おう」と設定された。授業では2部合唱が導入される後半部分を中心に、「強弱」に焦点をあてながら表現を思考する活動が展開された。この活動の根底には、児童の聴く力の育成がある。マスク着用のため声の響きは抑えられ、音程・リズムの正確さは判断しづらいが、児童一人ひとりが「強弱」を感じ取り易い実践形態「ア・カペラ」、そして少数グループによるアンサンブル活動は、聴くことに集中させる上で効果的であった。

テーマ「強弱をつくりあげて歌おう」に向き合い、自ら学ぶ力と自身の資質・能力を高めていこうとする児童の姿を具現化させるために、授業者は、以下に示す児童の姿を実践の中で把握することが必要であろう。

(1) 技能の習得：自身のパートを歌えること、そしてアンサンブルの練習過程において、もう一つのパートも無意識に習得している・習得し始めている児童の姿。

(2) パートの役割と音楽理解：自身のパートを歌いながら、別のパートと重なる部分やかけ合う部分などの音楽の仕組み等を理解し、それらを体得している・しつつある児童の姿。

(3) 歌詞から音楽表現の思考へ繋ぐ：歌詞が与えるイメージや歌詞に込められた意味を思考する児童の姿。自らの思いや表現したいという意図をもち、それらを強弱表現の工夫に繋げていく・いこうとする児童の姿。

体が楽器となる歌唱実践では、何度も強弱表現の試行錯誤を繰り返し、歌いこんでいくうちに体の中に音楽が浸透されていく。そうしたプロセスの中で、自分たちの合唱をつくり上げていこうとする意識が強化され、意欲が増していった。児童の自覚的な働きが増すにつれて、表現づくりへの「見方・考え方」がより深化していく。互いの歌声を聴き合い、言葉を交わし批評し合い、表現の工夫を認め合う児童の能動的な姿に、深い対話が交差する。仲間とともに音楽表現を思考する思いと音楽する喜びに満ち溢れていた児童の歌声は、コロナ禍であることを忘れさせてくれた。